

## 資料保存についての講演会および先進施設視察報告： 英国図書館・国立国会図書館・国文学研究資料館・ 明治大学図書館

芦北, 卓也  
九州大学附属図書館伊都地区図書課企画運営係

原賀, 可奈子  
九州大学附属図書館資料整備室図書受入係

<https://doi.org/10.15017/20110>

---

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2010/2011, pp.48-55, 2011-08. Kyushu University Library  
バージョン：  
権利関係：



報告

資料保存についての講演会および先進施設視察報告  
—英国図書館・国立国会図書館・国文学研究資料館・明治大学図書館—

芦北 卓也<sup>†</sup>, 原賀 可奈子<sup>‡</sup>

<抄録>

2011年2月15日と17日に行われた英国図書館の資料保存対策および書庫管理、保存環境に関する二つの講演会について報告する。また、国立国会図書館、国文学研究資料館、明治大学図書館の資料保存の先進事例を探った訪問の報告をする。

<キーワード> 資料保存, IPM, 自動書庫, 英国図書館, 国立国会図書館, 国文学研究資料館, 明治大学図書館

A report on the lecture and visits for the preservation and conservation

—British Library, National Diet Library,  
National Institute of Japanese Literature  
and Library of Meiji University—

Takuya ASHIKITA, Kanako HARAGA

1. はじめに

2011年2月、研究開発室「資料保存に関する調査研究」班の一員として、国立国会図書館で行われた講演会「英国図書館の資料保存対策 オリジナルからデジタルまで」「英国図書館の書庫管理と保存環境」に参加した。また、国立国会図書館、国文学研究資料館、明治大学図書館を訪問し、資料保存環境整備の先進事例を視察した。

2. 英国図書館の資料保存についての講演会<sup>1</sup>

資料保存の専門家で、英国図書館資料保存部長のデボラ・ノボトニー氏を講師に迎え、2日間の日程で行われた。英国国内外で資料保存関係の講演をなさっているとので、今回機会を得て貴重なお話を伺うことができた。

2.1. 英国図書館の資料保存対策 オリジナルからデジタルまで(2月15日)

2.1.1. 概要

英国図書館は、英国図書館法に基づき1972年に大英博物館図書館を始めとするいくつかの組織が統合され設立されたイギリスの国会図書館である。

その後、機能の大部分がセント・パンクラスへ集約・移転されたのを機に、「電子図書館部門」(学芸員6名が所属)が新設、資料のデジタル化や関係各所への相談・アドバイスを行っている。

また、2007年に設立されたコンサベーションセンター(British Library Centre for Conservation 略称 BLCC)により、大英博物館と英国図書館の保存・修復担当者が1ヶ所に集まることできるようになった。それに伴って、修復に関する研修等も行うことができるようになったという。館内にはパブリックエリアなどの新しい施設を備え、一般市民の利用が可能となった。

この日の講演では、英国図書館で実際に行われている資料保存対策について伺うことができた。資料の保存は図書館にとって永遠のテーマである。電子ジャーナルや電子書籍等、デジタル化への動きが加速している現代、英国図書館においては積極的にデジタル化を進めつつ、オリジナル資料の保存を模索している。

2.1.2. 特色

2.1.2.1. Conservation Studio

50名の修復技術士がおり、7チームを形成している。英国政府の財源問題により、BLCC 予算も削減対象になっているため、限られた予算の中でどのような対処をしていくか、財政面での課題も生じている。

2.1.2.2. International Collaboration (旧約聖書やシナイ写本など)

Mt Sinai・Leipzig・St. Petersburg・Londonに分散した聖書の写本をデジタル化することによってひとつにしようとするプロジェクトが2002年に始まった。このプロジェクトの完成によって、より多くの聖書研究者の

<sup>†</sup> あしきた たくや 九州大学附属図書館伊都地区図書館企画運営係 E-mail: ashi@lib.kyushu-u.ac.jp

<sup>‡</sup> はらが かなこ 九州大学附属図書館資料整備室図書受入係 E-mail: k-haraga@lib.kyushu-u.ac.jp

研究に与ることができるようになった<sup>ii</sup>。

デジタル化の際には、資料の状態について、ハイテク・ローテク技術を駆使し、羊皮紙に使われている動物の解明や過去に行われた修復の記録を取るという調査も同時に行った。このことによって、このプロジェクトの際に使用した調査方法を別の解析にも応用できる可能性が広がった。

### 2.1.2.3. 保存を意図していない素材の保存

英国図書館では、最近の雑誌等のおまけに付いてくるプラスチックのおもちゃやぬいぐるみ、ビニールレコードやジャケット、トーストにラッカを塗ったアーティストブックといった、形態が独特のものも保存されている。その中には布テープなど修復素材が問題となっているものや風船等のおまけが挟まっていたために、その跡で変色してしまったものもある。これらの資料はもともと保存する意図がなかったものであって、ある程度劣化しているものやむを得ない面はあるが、今後の取り扱いが憂慮されている。

これらの保存に関しては、音声・デジタル部門の専門家と協力して保存方法を検討していく必要がある。

### 2.1.3. 資料保存について

資料保存部はすべての資料に責任を負っている。コレクションへのアクセスを増やすべく、包括的なアプローチが必要である。

#### 2.1.3.1. 予防型保全

資料の処置は多くの人とその資料にアクセスできるように、また、研究対象となりうるように行うものである。

英国図書館では、資料の劣化や汚損を未然に防ぐため、保存の優先順位に応じて、保存ニーズアセスメント調査やリスク解析、サルベージトレーニング、環境モニタリング、IPM<sup>iii</sup>などに取り組んでいる。

#### 2.1.3.2. 利用者教育

英国図書館では資料が利用者の手に渡り、職員のもとへ戻ってくるまでに最大 10 名の手がふれることがある。その過程において、資料の取り扱い方やセキュリティ、職員の不注意等の問題があり、資料を傷める原因の大部分を占めている。そのため、リスク軽減の最大の鍵は利用者教育であると言える。

英国図書館では、入館手続き中、プラズマディスプレイで資料の扱い方の映像を流す<sup>iv</sup>など、利用者の目に留まる方法で利用者教育を行っている。また、担当スタッフに対しても定期的に研修を行っている。

#### 2.1.3.3. 救済チーム

館内にはサルベージトラック（スポンジなど、水害のバリアとなるものが入っている救急箱的なもの）が設置されている。2～3年に一度、地元の消防機関と話し

合って中身を決めていくという（日本では消防法の関係でこのようなものは置くことができないが、イギリスでは特にそのような法規制はないという）。新しいスタッフが入った際には、サルベージトレーニングを行っている。

### 2.1.3.4. 電子情報の保存

現在、英国図書館ではマイクロ化を行っておらず、デジタル化のみとしている。マイクロ化後・デジタル化後の原資料をどうするのかについては規定がないため、現時点では原資料はすべて保管しているという。

電子化されているものは、全アイテム 1 億 5000 万点のうち、ほんの一部であり、マスターファイルを安全に保存することに重点が置かれている。デジタル公開についてはこれからの面も多く、デジタル公開関連の法律について、議会で討議が行われているようだ。

## 2.2. 英国図書館の書庫管理と保存環境(2月17日)

### 2.2.1. 概要

書庫についての説明を受ける前に、2020年ビジョン<sup>v</sup>の紹介があった。これは英国図書館が掲げた長期戦略の文書で、英国図書館が経済や社会にどのような貢献をしていくか宣言したものである。施設や設備、取り組みに莫大な国費が投じられていることに対する英国図書館の理念と責任の大きさが感じられた。

次に、英国図書館のコレクションの大部分が収められているセント・パンクラスの新館が紹介された。これは、1998年に開館した新しい建造物で、プロジェクトで映されるスライドも豪華で美しかったが、特筆すべきなのは、防火、空気清浄化、省エネ・省資源、廃棄物の減量、環境汚染のモニタリング、職員の環境意識の促進等、環境パフォーマンス向上のためになされている様々な先進的取り組みである。

それから、ボストン・スパに新しく建設された自動書庫が紹介された。われわれ図書館の職員にとってボストン・スパといえばドキュメントサプライセンター(BLDSC)のある場所で、できたばかりの自動書庫に資料を移転する数ヶ月のあいだ、BLDSCへの文献複写依頼がキャンセルされていたのは記憶に新しい。本学にも自動書庫があり、比較しながら興味深く話を聞いた。

また、英国図書館ではこの自動書庫の導入で得られた知見をもとに、新聞資料用の自動書庫やマイクロ資料用の自動書庫も建設されており、その紹介もなされた。

### 2.2.2. 特色

#### 2.2.2.1. セント・パンクラスの書庫

セント・パンクラスにある図書館は閉架式の書庫で、一般的な通常の貸出サービスをしていない。冊子体の

資料は主に集密書架に配架されており、集密書架に入らない大型の資料は専用の固定書架に横置きされている。利用者からリクエストされた資料はベルトコンベアのような配送システム(Mechanical book handling system)で閲覧室まで届けられる。大学図書館と比較して、利用の便より保存を重視する書庫環境といえる。

他方で、利用者スペースから UV フィルターガラス越しに「キングス・ライブラリー・タワー」に収められた英王室の格調高い歴史的コレクションの威容を眺めることができたり、常設の展示室があったり、切手コレクションを自由に閲覧することができたりして、利用者に資料と接する機会を与えている。また、一般的な大学図書館と同様に、利用者が自分のノートパソコンでインターネットを利用できるスペースや自習用のラーニングセンターが設けられている。

#### 2.2.2.2. ボストン・スパの書庫

ボストン・スパには 700 万冊収蔵可能とされる自動書庫がある。本学の伊都図書館にある自動書庫は 80 万冊の規模であり、その巨大さを実感できる。自動書庫の利点は、第一に収容能力が高いことであるが、運用上窓や照明が不要で紫外線による資料の劣化を抑制できるという資料保存面の利点もある。ボストン・スパの自動書庫は、特殊な装置で気密性を高め、窒素の注入により酸素濃度を 15%まで下げ、人間は呼吸可能だが紙は発火しないという低酸素環境を備えた画期的なものである。あくまで防火設備としての説明だったが、カビや害虫の侵入、成育を抑えることにも一定の効果が見込まれ、自動書庫の資料保存上の利点を拡大させたものといえる。

さらに英国図書館は、劣化が進んだ新聞資料やマイクロ資料のための自動書庫も開発している。マイクロ資料専用の自動書庫は気温 5℃、湿度 30%の低温・乾燥環境の書庫となっており、自動書庫であれば、人間の滞在に必要な環境の制約に縛られず、資料の保存に特化した最適の環境を整えることが容易であることを物語っている。

こうした自動書庫の導入にはコストがかかるが、傷んだ資料の修復に費用をかけるより資料が傷むのを未然に防ぐほうが結局は安上がりであること、また、大量の資料を劣化前に電子化するには大きな予算が必要で、劣化を遅らせることが電子化するまでの時間稼ぎとしても有効であるとの指摘があった。最後に、自動書庫に資料を移転する際、埃や虫が自動書庫の中に入らないように大量の資料をクリーニングしてから運び込んだという話もあり、設備も重要だが、それを使用する人間の地道な努力も大切であることを再認識した。

### 3. 先進施設視察

#### 3.1. 国立国会図書館

##### 3.1.1. 概要

国立国会図書館は日本で唯一の納本図書館であり、収集された多くの資料を国の文化的財産として保存する使命を負っている。また、国際図書館連盟資料保存コア活動(IFLA/PAC, IFLA Core Activity on Preservation and Conservation)のアジア地域センターに指定されており、国内外に対するさまざまな保存協力活動を行っている。今回参加した英国図書館の資料保存に関する講演会もその一環で行われたものであり、その合間に特段のご厚意で見学を認めていただいた。

今回見学したのは 1986 年に完成した新館の書庫である。案内を受けながら、エレベーターで階ごとに雑誌や新聞、マイクロ資料、古典籍の各収蔵場所を見学して回った。最後に、書誌収集部資料保存課で行われている資料保存作業の現場を見学することもできた。

##### 3.1.2. 資料保存の取り組み

###### 3.1.2.1. 環境[1][2]

###### 3.1.2.1.1. 新館書庫

新館書庫は広大で、セキュリティ上の観点から内部を移動するには IC カードの所持が義務づけられており、スタッフであっても所属係によって特定の場所への立ち入りが制限されているという。

新館書庫の地下は 8 層もの深さで水の侵入が懸念されるため、幾種もの防水工事が入念に施されている。地上 1 階床部分を防水して地上からの浸水を防いでいるのはもちろん、地下部分では遮水性の高い地中連続壁工法が取られていることに加え、連続壁の内側がゴムアスファルトの防水シートで覆われ、さらにその上から同素材の吹き付けがなされている。建物内部は二重壁とのことで、書庫は地中で防水性の高い層によって何重にも包まれた状態になっている。しかも、こうした防水設備の耐用年数は半永久的で維持費は不要であり、過去カビの発生や漏水の被害もないとのことである。万一漏水した場合は、外壁に設置された樋から最下階床下部の地下ピットに水が流れ、そこからポンプで地上部に排水される仕組みになっている。

また、新館書庫の空調設備には、空気中に浮遊する塵や埃を除去するため、帯電微粒子中性化装置が組み込まれている。通常の電気式集塵機では空気中の微粒子が電気を帯びているため壁・天井・衣服・収容物に付着しやすいのに対し、帯電微粒子中性化集塵機ではそうした現象が少なく、微粒子がフィルターで除去されやすいとされる。

###### 3.1.2.1.2. 貴重書庫

国立国会図書館の貴重書庫は 1993 年に完成してい

る。書庫完成から資料搬入までに約半年の枯らし期間を置いていたようである。

書庫内はA・B・Cと3つに区分けされており、B・C庫のさらに奥にA庫が設けられている。資料は貴重書のレベルに応じて、A庫、B庫、C庫に保管される。B庫よりもA庫で空気圧が高くなるようにされており、塵埃がA庫内へと入らないように工夫されている。

また、貴重書庫の空調設備には高性能フィルターが使用されており、塵埃の平均捕集率が貴重書庫以外では65%であるのに対し、貴重書庫では90%以上とされている。

### 3.1.2.2. 温湿度管理

一般書庫と貴重書庫はともに気温22℃(±2℃)、湿度55%(±5%)に保たれている。24時間自動制御され、大きな温湿度変化は見られない。

貴重書庫は個別空調であるほか、自動計測装置によって毎時間温湿度が記録され、それを職員が日に二度確認している。また、原則として入室を担当職員のみ制限することで、人の出入りによる温湿度変化を抑制している。

マイクロ保管庫も個別空調で、気温18℃、湿度25%とされているが、これはTACベース向けの温湿度設定で、ポリエステルベースのものには乾燥しすぎているとのことである。さらに制約の厳しいカラーのマイクロ資料は別途ドライキャビネットで保管されている。マイクロ資料は素材毎に別々の環境で保存するのが望ましい。

### 3.1.2.3. 照明

照明は場所によって人感センサーと手動による点灯・消灯が併用されており、手動の照明はこまめな消灯を心がけているとのことである。本学伊都図書館と同様に、電動集密書架には自動点灯の機能がある。また、低紫外線の蛍光灯が使用されているほか、LEDの導入も検討されているとのことである。

### 3.1.2.4. 消火ガス

消火ガスとして、本館では二酸化炭素、新館ではハロンガスが使用されている。子ども図書館・関西館ではナージェンガスが使用されているとのことである。

### 3.1.2.5. その他

#### 3.1.2.5.1. IPMの取り組み<sup>vi</sup>

IPMでは、温湿度の管理、掃除、汚染物質の回避、の3点に重きを置いているという。どこで何が起きているのか、モニタリングによって現状を把握することが必要である。例として、チャタテムシが急増した場合はカビが出ていることを疑う、ということ挙げさせていただいた。現状把握によって原因を特定し、対策を立てることができる。また、新しく入ってくる資料

は、館内に入れる際にクリーニングを行うことにより、外部から虫やカビなどを持ち込むことを防ぐことができる。

靴底の泥や埃を書庫内に持ち込まないための工夫として、書庫入口の床に吸着マットが敷いてあった。また、見学者には不織布でできた使い捨ての靴カバーが用意されていた。職員には上履きの着用が奨励されているとのことである。

訪問日は休館日で業務委託の清掃業者が入っており、不織布のシートをつけたモップで床を清掃していた。「水分大敵」の書庫では雑巾での水拭きはしていないようだった。

#### 3.1.2.5.2. 配架

通気性を保つためにも、最下部の棚は床下から15センチは空いているほうが良いという。また、7段以上の書架であれば、使用するのは5段程度で収め、上下の棚を空けておいたほうが、より通気性が良くなる。また、利用者の利便性との兼ね合いもあるが、棚の手前に資料を並べるよりは5センチほど奥に並べたほうが地震等の振動でも落下しにくいという。

#### 3.1.2.5.3. 書誌収集部資料保存課

資料保存課は保存企画係・洋装本補修係・和装本補修係の3係から成る。洋装本補修係・和装本補修係はともに館内の資料補修の実務担当である。

和装本補修は最初に案内された事務室奥の畳敷きの和室で行われており、和装本に限らず古地図などの一枚物の資料の補修も行っていった。事務室内は工房さながらで、絞め機やプレス機、箔押し機等、製本に必要な様々な道具が揃っており、館内のあちこちから送られてくる傷んだ資料を忙しそうに修復していた。また、ニチマイのリーフキャスト機<sup>vii</sup>があり（オリジナル資料には使用しないとのこと）、行われている業務の幅広さを実感した。1969年以前の刊行図書は大抵デジタル化されていて原本の利用を制限しているため、洋装本の補修は無線綴じ補修が多いとのことであった。

保存企画係では講演会等の企画・進行以外にも、温湿度を記録するデータロガー60台の調整やチェック等も行われていた。データロガーの精度には微妙な個体差があるため、それぞれのデータロガーの癖を掴み、活用していく必要があるという。

## 3.2. 国文学研究資料館

### 3.2.1. 概要

資料保存の専門的な研究者やスタッフを擁する上、2008年に建設されたばかりの新しい施設を持ち、さらに本学附属図書館と学術交流協定を締結したばかりという縁もあって、国文学研究資料館を見学した。

国文学研究資料館は日本文学関連の調査・研究活動を行い、原資料の収集、マイクロ化や電子化を進めている。資料は専門的な技術で整理・保存され、図書館や常設の展示室、ウェブ上のデータベース等で一般の利用者にも提供されている。

また、大地震の発生が危惧されている立川断層のそばに立地しており、高度な地震対策が講じられているのも特徴である。

### 3.2.2. 資料保存の取り組み

#### 3.2.2.1. 環境

##### 3.2.2.1.1. 書庫

電動集密書架には休館日・夜間に自動で書架同士の間隔を開ける仕組みが備わっており、通気性が確保されている。また、送風設備もあり、時期によっては除湿も行う。棚には調湿ボードが敷かれている。

貴重書庫内には金剛株式会社製の空気循環マルチクリンシステム<sup>viii</sup>が採用されている。漆塗りの函に入った資料もあるが、函内に空気がこもってしまうため、カビが発生してしまうこともあるという。棚の中に中性紙保管箱を埋め込むことで光の遮断をしたり、床面を15センチ開けることで空気の通りを良くしたりという工夫もなされていた。年に2回、職員が貴重書庫内を紙モップで清掃しているという。集塵機も設置されていた。

書庫内の図書資料は、外箱やジャケットを極力廃棄せず残しているという。保護用になるほか、本体にはない情報が含まれていることもあるためである。

##### 3.2.2.1.2. 収蔵庫

大学図書館であれば貴重書庫に相当する設備で、図書資料以外の近世・近現代史料や器物資料が収蔵されており、後述のゾーニングにより、保存管理の基準が書庫より高く設定されている。

保存に適した中性紙製の段ボール箱が棚に合わせて詰め込まれており、収納性が高められている。箱の前面が開くようになっていて、資料の取り出しが容易である。



写真1 中性紙製段ボール箱詰め込み収納

##### 3.2.2.1.3. 保管庫

展示のために他機関から借りた資料を一時保管し、資料の状態を落ち着かせるための保管庫がある。壁にはパンチングされた調湿ボードを使用し、空気の流れを阻害しないように工夫されている。

##### 3.2.2.1.4. マイクロ保管庫

マイクロ保管庫は、利用用の保管庫と永久保管庫の2つに分けられている。利用用マイクロ保管庫ではTACベースからPETベースへとほとんどのマイクロフィルムを変換済みであり、マザーテープは廃棄されているものが多いという。永久マイクロ保管庫内では、温度 $20^{\circ}\text{C}\pm 2^{\circ}\text{C}$ ・湿度 $30\%\pm 5\%$ 、温度 $18^{\circ}\text{C}\pm 2^{\circ}\text{C}$ ・湿度 $25\%\pm 5\%$ の2種類の基準があるが、現在は温度 $16^{\circ}\text{C}$ ・湿度 $25\%$ を適用しているということである。フィルムは縦置きで中性紙箱に入れられていた。

##### 3.2.2.1.5. 害虫処理室

室内にはマルチクリン棚、真空凍結乾燥機、窒素発生装置を備えている。マルチクリン棚は、害虫のリスクが少ないと判断された資料を保管し整理時まで目視観察を行う目的で設置されたそうであるが、目視観察では害虫皆無の確証が得られないため、窒素殺虫を必ず行っているという。

化学薬品を使用せずに害虫を処理するために空気中から取り出した窒素を用い $30^{\circ}\text{C}$ 以下で3週間、窒素殺虫を行う。窒素を用いるのは、空気中で最も多い気体であるので、資料への影響が少ないと考えられるためである。

##### 3.2.2.1.6. 展示室

温度は $24^{\circ}\text{C}$ に設定されている。また、照明を落とし、ワンポイントを明るくして「見せる」という工夫が行われていたが、これは資料に対する直接照明の照射を少なくする意味でも効果的である。急激な温度変化は資料の敵であるため、収蔵庫から閲覧室へと移送する際に、なるべく温湿度の変化がないように気を使うという。

のぞき型展示ケースは特別製で、見学者が展示物をのぞき込む際に手を突いて姿勢を保てるような板状の台がケースの前面に設置されている。展示ケース内部の空気汚染物質や温室度の計測、環境変化の要因調査も実施されている。

##### 3.2.2.2. 温湿度管理

「変温恒湿」の観点から、温度管理より湿度管理が重視されている。空調により温度を24時間一定に保つには経費がかかりすぎ、かといって空調の稼働時間を制限すると日中と夜間の温度変化が大きくなってかえって資料に悪影響を及ぼす。そのため、書庫では温度の管理は行わず湿度管理のみ行われている。

### 3.2.2.3. 照明

白熱灯から白熱電球へ変更したり、紫外線カットの蛍光灯やハロゲンランプを使用したりしている。また、直接間接含め自然照明は当たらないようにしている。

### 3.2.2.4. 消火ガス

書庫の消火装置は窒素ガスが使用されている。

### 3.2.2.5. その他

#### 3.2.2.5.1. IPM の取り組み

図1のように、IPM 活動のため施設全体が5段階にゾーニングされている[3]。事務室その他の公共エリアから害虫処理室エリア、閲覧室・展示室エリア、書庫・作業エリア、収蔵庫・保管庫エリアへと建物の入り口から奥に向かうほど保存環境管理が厳重に行われる。

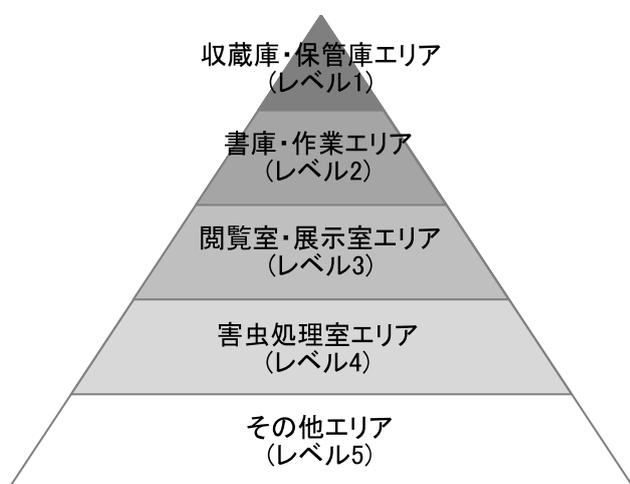


図1 国文学研究資料館の段階別レベル階層[3]

エリア別の害虫補足傾向を把握するため、年に4回、季節毎に害虫トラップが仕掛けられ、生物生息モニタリングが実施されている。作業には文化財科学を専攻する学生もボランティアで加わり、学生が作業で覚えたことを周囲に教えることで IPM の知識が広まることにも期待がもたれている。

IPM のゾーニングは保存環境や防災、防犯のためのゾーニングでもあり、各セキュリティレベルに応じた各種設備が整備されている。また、生物生息モニタリングのほか、温度・湿度の環境モニタリングや空気循環計測器による酸やアルカリ物質などの化学物質の調査も行われている。

その他、すべての窓に網戸を設置して虫が入らないようにしたり、壁の巾木をなくして立ち上げ床とし、巾木の上に虫の餌となる埃が溜まらないようにしたりといった工夫もなされている。



写真2 生物生息モニタリングのための害虫トラップ

#### 3.2.2.5.2. 燻蒸

燻蒸薬品は人間に害があるので使用しないことにしているという。受入時に害虫処理室で殺虫処理をする方針のため、配架後の埃等の影響を減らすために靴の履き替えをしている。

#### 3.2.2.5.3. 地震対策

閲覧室の書架が地震の揺れを吸収する免震棚になっており、書架が倒れたり資料が床に落下したりしにくいようになっている。また、建物全体が免震構造になっており、床下の基礎部に地震の揺れを軽減する天然ゴム系積層ゴムアイソレーターを備えた200基もの免震装置が設置されている。



写真3 免震書架の脚部

## 3.3. 明治大学図書館

### 3.3.1. 概要

明治大学図書館では2006年に資料保存をテーマとした企画展示が行われている<sup>15</sup>。本学附属図書館でも近年同様の催しを行っており、共通の関心をもつ職員が多いことがうかがえた。また、本学と同様に新図書館

の建設計画があり、杉並区にある和泉キャンパスで2012年1月末に新図書館が竣工予定となっている。

今回見学させていただいた神田の駿河台キャンパスにある明治大学図書館中央図書館は、2000年竣工、2001年開館の地上1階、地下3階の建物である。公開空地の関係で地上に高い建物が建てられないため、このような建築となっている。裏手の傾斜を活かした造りとなっており、曲線を用いた設計となっている。地下まで陽光を取り入れるための明かりとりを工夫し、また、外堀から光を取り入れるため、閉塞感のない造りとなっている。外壁曲線部分を吹き抜けにしていることも明るさに一役買っている。2002年には第18回日本図書館協会建築賞も受賞している。マイクロ自動書庫も備えた図書館である。

### 3.3.2. 資料保存の取り組み

#### 3.3.2.1. 環境

##### 3.3.2.1.1. 閲覧室

地下3階まで閲覧席のある関係から自然光を取り入れる造りとなっているが、窓際に閲覧席を置き、奥に書架を設置することで、資料が光の影響を受けにくいように工夫されている。

##### 3.3.2.1.2. 書庫

入口はB2開架からのみ(教員のみ2Fの研究棟よりエレベーターで降下可)である。書庫には温湿度計と除湿機が設置されていた。除湿機はカビが出てから置きはじめたという。

##### 3.3.2.1.3. 貴重書庫

貴重書庫は地階にあり、前室がある。前室ではスリッパ等に履き替え、貴重書庫内に塵埃を持ち込まない工夫がされていた。貴重書庫の入口は二重扉となっており、それに加えて、内側に網戸を設置することで虫よけ対策もなされていた。

書庫内はブナ材フローリングによる白木の床であり、スチール棚に杉合板、その上に中性紙ボードが敷いてある。壁面と天井は一面の調湿ボードであり、落ち着いた抹茶色のボードが使用されていることもあり、一見すると和室のようであった。

書庫内には二重鍵のかかった貴重書庫Aがあり、貴重書の中でも特に重要な資料を収めてある。ここでは樺桜材木製キャビネットが用いられており、キャビネットの上下には通気口が付いていた。大きな中性紙箱や大型本が置ける棚(ナポレオン遠征紀等)もある。和装本は平置きにしているものが多かった。

貴重書閲覧は、開架のグループ閲覧室でさせることがあるため、グループ閲覧室の照明は紫外線カットのものを使用しているという。

貴重書庫内には、耐震構造、防火壁も備えられてい

る。



写真4 貴重書庫入口の網戸

##### 3.3.2.1.4. マイクロフィルム自動書庫

書庫3層にマイクロ自動書庫(丸善株式会社製のM-Active II)が設置されている。ここには25万リールの収容が可能であるという。

マイクロ自動書庫の下は電動集密書架となっていた(独立二層マルゼンエレコンパック)。

##### 3.3.2.2. 温湿度管理

館内では相対湿度の管理に重きを置いているという。貴重書庫内では、温湿度を24時間管理しており、温度20℃前後、湿度50%前後になるように調節されている。

##### 3.3.2.3. 照明

貴重書庫内では紫外線防止蛍光灯を使用し、書庫内利用時のみ点灯している。

##### 3.3.2.4. 消火ガス

貴重書庫内の消火ガスはハロゲン化物、ハロン1301となっている。

##### 3.3.2.5. その他

###### 3.3.2.5.1. 燻蒸

部分的には燻蒸済み資料もあるが、基本的には書庫収納に際して事前燻蒸は行っていないという。図書館内で燻蒸は行っていないが、博物館で燻蒸を行う際に資料を渡して一緒に燻蒸してもらうことはあるそうだが、資料への影響を考え、燻蒸は最小限にしているようである。一部和古書には防虫シートを入れているものもあるという。防虫剤を配置しているところもあるそうだ。

###### 3.3.2.5.2. 地震対策

書架同士をつなぐ棒で壁に固定している。

## 4. おわりに

英国図書館の資料保存についての講演会に参加し、

世界最先端の技術や意識、取り組み、書庫の在り方について学ぶことができた。また、国立国会図書館、国文学研究資料館、明治大学図書館を視察し、各々の資料保存の取り組みや書庫環境の特色を知ることができた。今回得られた知見を本学の新図書館計画に対する資料保存面からの意見具申に役立てたい。

今回の訪問先では各施設の担当者の方々に非常にお世話になった。国立国会図書館では講演の準備でご多忙にも関わらず施設見学をご快諾いただいた。国文学研究資料館では担当教員による講義形式のご説明までしていただいた。明治大学図書館では、過敏な入試の時期にお邪魔しご迷惑をおかけした。各施設の一方ならぬご厚意にこの場を借りて心から感謝を申し述べたい。

### 参考文献

- [1] 国立国会図書館. 国立国会図書館の書庫：貴重な文化的財産を後世に伝える. 国立国会図書館月報. 2007, vol. 558, p. 1-17. <http://www.ndl.go.jp/publication/geppo/pdf/geppo0709.pdf> (参照 2011-6-3).
- [2] 国立国会図書館. 国立国会図書館の書庫(第6回)：書庫の中の書庫 貴重書庫. 国立国会図書館月報. 2009, vol. 584, p. 14-15. <http://www.ndl.go.jp/publication/geppo/pdf/geppo0911.pdf> (参照 2011-6-3)
- [3] 青木睦. MLA における IPM 活動の新しい実践と指向. パッション. 2010, vol. 32, p. 9-10.

---

<sup>i</sup> 当日の配布資料及び読み上げ原稿が国立国会図書館 HP に掲載されている。(参照 2011-6-3)

URL: [http://www.ndl.go.jp/aboutus/data\\_preserve25.html](http://www.ndl.go.jp/aboutus/data_preserve25.html)

<sup>ii</sup> URL: <http://www.codexsinaicus.org/en/> (参照 2011-6-3)

<sup>iii</sup> IPM とは Integrated Pest Management の略であり、総合的有害生物管理と訳される。

<sup>iv</sup> URL: <http://www.bl.uk/aboutus/stratpolprog/ccare/collecioncarevideos/> (参照 2011-6-3)

<sup>v</sup> URL: <http://www.bl.uk/aboutus/stratpolprog/2020vision/the mes/index.html>, (参照 2011-6-3)

<sup>vi</sup> 国立国会図書館の IPM の取り組みについては HP にも記載されている(参照 2011-6-3).

URL: [http://www.ndl.go.jp/aboutus/data\\_operat\\_ipm.html](http://www.ndl.go.jp/aboutus/data_operat_ipm.html)

<sup>vii</sup> URL: [http://www.nichimy.co.jp/\\_service/svc\\_index\\_08.html](http://www.nichimy.co.jp/_service/svc_index_08.html) (参照 2011-6-3)

<sup>viii</sup> URL: <http://www.kongo-corp.co.jp/08senmon/21.html> (参照 2011-6-3)

<sup>ix</sup> URL: <http://www.lib.meiji.ac.jp/about/exhibition/gallery/12/12 index.html> (参照 2011-6-3)